

（1）なかなかに人とあらずは酒壺に成りにしてしかも酒に染みなむ。《Aいつそ人間をやめ、ずっと酒に浸れる酒壺になりたい。①突拍子（とつぴようし）もない願望を歌にした人がいたものである。②大伴旅人（おおともとのたびと）。奈良の昔、③公卿（ぐぎょう）にして一流の教養人だった▼旅人は天平2（730）年春、九州・大宰府の公邸で④宴（うたげ）を⑤催（もよお）している。招かれたのは九州一円の役人や医師、⑥陰陽師（おんみようじ）ら31人。庭に咲く梅を詠み比べる歌宴だつた。」（2）初春の令月にして、氣淑く風和ぎ。旅人の書き残したとされる開宴の辞から採られたのが、新元号「令和」である▼辞には続きがある。「天空を覆いとし、大地を敷物として、くつろぎ、ひざ寄せ合つて⑦酒杯（しゅはい）を飛ばす。《Bさあ》園梅を歌に詠もうではないか。枝を手折り、雪にたとえ、酒杯に浮かべる公卿らの姿が浮かぶ▼（3）「令和」にどのような感想をお持ちになつただろう。令や和の字を持つ方は、これからしばらく話題に事欠くまい。ここを⑧ショウキ（商機）と万葉集コーナーを設けた書店もある。お祭り騒ぎはしばらく続きそうだ▼さて、万葉の昔に戻れば、60余年の大伴旅人の生涯に、元号は驚くほど⑨ヒンパン（頻繁）に代わっている。《C やれ》⑩吉兆（きつちよう）の亀が発見されたと見て「神亀」。奇跡の水が見つかると「養老」。ほかに「朱鳥」「大宝」「慶雲」「和銅」「靈亀」「天平」。《Dまるで》改元のインフレのようである▼そんな時代を知る旅人だが、（4）酒席で述べた挨拶が1300年後の元号になつてしまふとは。「一日酔いの夢にも想像しなかつたことだろう。

〔2019年4月2日「天声人語〕

問一 ①～⑩のカタカナ部は漢字に直し、傍線部は読みを書き入れなさい。
問二 傍線部（1）「なかなかに」を口語訳しよう。

（中途半端に）

問三 次の（）に適する語を語群から選び、書き入れよう（出典「酒讃歌」）。

- ・（験）なきものを思はずは一壺の濁れる酒を飲むべくあるらし
- ・あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば（猿）にかも似む
- ・（価）なき宝といふとも一壺の濁れる酒にあにまさめやも
- ・この世にしたのしくあらば来む世には虫に（鳥）にも我はなりなむ

〔語群〕 ・価 ・験 ・鳥 ・猿 ・酒 ・玉

問四 《A》～《D》に適する語を次から選び、書き入れよう。

・さあ ・まるで ・やれ ・いつそ ・かつて

問五 傍線部（3）について、あなたの抱いた感想を30字程度で述べてみよう。

〔答例〕（注目度は高いようだが、日本は元号をいつまで使い続けるのだろうか。）

問六 傍線部（4）から伺える筆者の気持ちに最も遠い選択肢の記号を○で囲もう。

ア 酒席の挨拶からの元号に疑問。イ 新元号はそれぞれに受け止めよう。
ウ 元号への尊重はほどほどに。④ 今回は意外な言葉が元号に採用された。